

論文

職場と養成校をつなぐ実践的指導方法に関する研究

岡正 寛子¹⁾・荒島 礼子²⁾・中川 淳子³⁾・森 英子⁴⁾

キーワード：自己成長曲線、実習前後経験、リアリティ・ショック

要旨：早期離職に至る背景には、職務内容などに対する理想と、就職後に直面した現実とのギャップに対処しきれず、精神的なショックを受ける「リアリティ・ショック」が少なからず起因していると考えられる。そのリアリティ・ショックを緩和し、養成課程で培った実践力を発揮することができるよう、職場と養成教育との接続が必要になっている。

そのために、資格・免許取得のための学外実習の役割は大きいと考える。そこで、本研究では、学生自身の実習体験の振り返り、実習前後の経験の有効性を検証することで、職場と養成教育をつなぐ実践的指導法を検討することを目的とした。

調査の結果、実習前後の職場での経験と先輩・同級生など学生同士の経験の共有が、①現場の体制や取組に関する葛藤、学生自身に関する葛藤の両面への脱却の一助となり、実習時のリアリティ・ショックの緩和に役立つと示唆された。また、実習前後の職場での経験を自主的に実施するためには、職場経験の振り返りと動機づけが重要であることが明らかとなった。

1. はじめに

待機児童問題や保育所不足、保育士不足が社会問題となっているなか、保育士の離職率は10.3% (平成25年)、幼稚園教諭の離職率は10.7% (平成22年度) と高い状況となっている。また、加藤¹⁾らの調査において、在職期間3年未満の退職者が、幼稚園では63%、保育所では81%存在していたと示されており、離職の中でも早期離職が社会的課題となっている。

本学においても、保育士資格・幼稚園資格を取得し、専門職に就職したものの新任段階(3年未満)で休職や離職に至る卒業生や、休職や離職には至らないものの精神的疲労を感じる卒業生が多くみられている。

退職に至る理由として、森本ら²⁾が行った「進路変更」や「身体的・精神的な体調不良」に至った原因について質問した調査によると、「責任の重さ」・「知識能力不足」・「職場の人間関係」が上位に挙げられていた。また同調査にて、職場定着を困難にしている理由として、「卒業時と現場で求める実践能力のギャップ」と「現代の若者の精神的な未熟さ」が挙げられていた。

このことから、早期離職に至る背景には、職務内容などに対する理想と、就職後に直面した現実とのギャップに対処しきれず、精神的なショックを受ける「リアリティ・ショック」が少なからず起因していると考えられる。そのリアリティ・ショックを緩和し、養成課程で

¹⁾²⁾³⁾⁴⁾ 山陽学園短期大学幼児教育学科

培った実践力を発揮することができるよう、職場と養成教育との接続が必要になっている。また、職場と養成教育との接続を行うことで、卒業時と現場で求められる「実践能力」間のギャップを埋めることも必要となる。

上記の緩和のために、資格・免許取得のための学外実習の役割は大きいと考える。そこで、本研究では、学生自身の実習体験の振返り、実習前後の経験の有効性を検証することで、職場と養成教育をつなぐ実践的指導法を検討することを目的とする。

2. 研究方法

実習体験を振返り、実習前後の経験の有効性について検証するために、①実習終了後の学生を対象とした質問紙調査およびフォーカスグループインタビューを実施した。

1) 質問紙調査

(1) 調査対象

保育実習・教育実習を終了した学生63名（回収率100%）を対象とした。

(2) 調査時期

平成28年12月から平成30年1月までの期間のうち、保育士・幼稚園教諭に係わる実習終了後（1回目：平成28年12月、2回目平成29年6月、3回目：平成29年9月）と養成課程の全授業科目終了時（平成30年1月）の計4回調査を実施した。

(3) 調査方法

調査にあたり、本研究の目的・内容、本研究への回答は任意であり、成績などには一切影響しない事ことを口頭および書面にて示したうえで各実習終了後および全授業科目終了時に自記式での集合調査法にて実施した。

①調査項目

調査内容は、①実習に向けての事前準備に関する項目（3項目）：事前準備実施状況（3件法）、事前準備を行った理由（選択）、準備をしておいた方がよいと思う内容（自由記述）、②実習前の経験に関する項目（2項目）：実習前に役立つ経験（選択）、事前に経験しておいた方がよいと思う内容（自由記述）、③実習で経験した内容に関する項目（3項目）：実習経験内容（3件法）、部分実習・全日実習内容（自由記述）、実習中の困難な出来事（自由記述）、④実習スーパービジョンに関する項目（1項目：4件法）、⑤実習の自己評価に関する項目（1項目：4件法）、⑥実習後の経験に関する項目（1項目）：事後に経験した方がよいと思う内容とその理由（自由記述）⑦自己成長曲線の7種類の項目を設定した。

調査内容のうち、②実習前の経験に関する項目、⑥実習後の経験に関する項目のうち、経験内容については、本学独自科目である職場体験を目的とした「子育て支援実習」の時間数として評価されるもの、および、学校行事と自由記述の10個の選択肢を設定した。また、⑦自己成長曲線は、全国保育士養成協議会専門委員会の課題研究³⁾が開発したものを参考に、入学直後の4月から2年生となる1月までの期間を横軸、各月ごとに自己成長度を数値化し縦軸に記載し、グラフ化した。さらに、自己成長につながったと思う出来事について特記事項として記載してもらった。

(4) 分析方法

分析は、以下の方法にて分析を行った。

- ①SPSS (Windows版Ver16.0) を使用し、すべての項目について基礎集計を行った。
- ②自己成長曲線に関する項目については、就職先別に保育士、幼稚園教諭、その他(一般企業・進学等)の3群間に分類し、各月毎の3群それぞれの平均値について、分散分析を用いて比較した。
- ③自由記述の内容については、保育・教育現場経験者にてカテゴリー化し、カテゴリーごとに名称を付けた。

2) フォーカスグループインタビュー

(1) 調査対象者

対象者は、質問調査の対象者63名のうち、以下の2つの要件を設定し、選定した。要件は、

- ①進路希望が明確であること、
- ②保育所、幼稚園、保育所を除く児童福祉施設、その他専門職以外(進学含む)の各分野から2名以内とした。

要件に合う学生に対し、本研究の目的・内容、本研究への回答は任意であり、成績などには一切影響しないことを口頭および書面にて示したうえで研究への協力に同意が得られた7名を対象とした。

(2) 調査時期

平成29年11月(保育所実習終了後)

(3) 調査方法

グループに対して約60分かけて行った。インタビューの場所は、普段から使い慣れている教室にて行った。司会者は研究者が担当した。また、対象者に承諾を得た上で言語的、非言語的コミュニケーションを筆記した。

以下の6点を質問項目とし、インタビューガイドを用いて対象者に質問をした。

- ①各実習を振り返っての感想
- ②各実習での困難への対応方法
- ②各実習(施設実習・保育所実習・教育実習)の前後に行ってよかったと思うこと
- ③実習に必要な不可欠な知識・スキル
- ④実習前後にあった方がよいもの・こと

(4) 分析方法

得られた回答についてKJ法を用いて、グルーピングを行い、それぞれに表札をつけ関係性を図式化し、整理した。

3. 結果

1) 質問紙調査

(1) 事前準備・経験の有用性

実習において事前準備を行なった学生は96.7%、行わなかった学生は3.3%であった。事

前準備を行った理由では、実習中の時間的余裕（60%）が最も多く、次いで精神的不安の解消（56.7%）であった（図1）。

実習前の役立つ経験としては、保育所、幼稚園、保育所を除く福祉施設が最も多くなっていた（図2）。附属幼稚園での交流会やボランティアについては、他の実習に比べ、教育実習前に役立つとの回答が多い。一方で親子交流広場などの子育て支援イベントについては、保育所実習前に役立つとの回答が多かった。

また、事前に経験しておいた方がよいことについての自由記述には、選択肢と重複するもののボランティアを挙げる学生が多く、ボランティア経験を高く評価していることがうかがえた。

(2) 実習後の経験の有用性

実習後の経験として行った方がよいものについては、ボランティア活動が最も多かった。その他、人前に出て発言・行動をする機会、保育士・幼稚園教諭の業務をみる機会など就職を意識した内容の記載がみられた。

(3) 自己成長曲線の変化（図3）

① 入学後から後期開始前まで

全体的に自己成長曲線が入学後、成長曲線は9月までは上昇がみられたが、9月から10月の期間で下降している。この背景について、学生自身は夏季休暇ということがあり、他のことに気持ちが動いていたと特記している。

一方で、8月も夏季休暇期間ではあったが、上昇していた。保育所・幼稚園・社会福祉施設等でのボランティアが課題として提示されており、全員が何らかのボランティアを実施していたことを特記している。

② 後期開始から施設実習終了後（1年次2月）まで

10月以降は、後期が開始されたことで、再度2月まで継続しての上昇がみられた。特に1月から2月にかけての上昇率が最も高くなっていた。12月は、資格・免許に関わる初めての实習となる「施設実習」を実施しており、その経験の振返りを1月～2月にかけて行っている。また、次の「教育実習」に向けた準備も進んでいる時期であることから、集中力が欠けなかったためと示唆される。

③ 教育実習終了（1年次3月）から教育実習終了（2年次7月）まで

3月から6月までの期間では、継続した上昇がみられた。

この間の2～3月の間には、春季休暇があったが、夏季休業期間に比べ、成長率の低下はみられなかった。この背景には、2月、3月に順次教育実習〔観察〕があったこと、就職活動に向けたボランティアを実施した等の特記記述があり、その経験により成長曲線が下降しなかったと考えられる。

④ 教育実習終了後（2年次8月）から後期授業終了時（2年次1月）

8月から1月までの期間では、保育所実習の期間である8月から9月の上昇率がやや高いものの、それ以降は極めて緩やかなものになっている。

⑤ 進路別成長曲線

就職先での業務内容に応じ、保育士、幼稚教諭、その他（一般企業・進学）の3分類を設定し、それぞれの月の平均値を比較した結果、1年次2月（ $p < 0.01$ ）、3月（ $p < 0.05$ ）、2年次4

月 ($p < 0.05$) で「保育士」と「その他」の間に有意差がみられた。

保育士、幼稚園教諭以外の進路では、1年次6月以降、保育士・幼稚園教諭の成長曲線に比べすべての月で自己評価が低くなっていた。

幼稚園教諭については、有意差はみられなかったが保育士やその他の進路の学生が停滞している状況がみられる期間の2年次11月～1月で、成長曲線の上昇がみられた。この背景には、早くから就職が決定したことで、就職先のボランティアや研修などに参加していることが特記されていた。

2) フォーカスグループインタビュー

インタビュー調査の結果は、以下の4項目にまとめられた。

(1) 実習経験に関する感想

a. ポジティブなキーワード

施設実習、保育所実習、教育実習のいずれの実習でも叱り方やほめ方、指示が守れないときの対応、子どもへの伝え方など「専門職の子ども（利用児者）との関わり方」に関する内容が多く挙げられた。

また、他職種との連携に関して勉強できたとの発言もあった。

b. ネガティブなキーワード

施設実習に関しては、宿泊に対する不安、初めての实習に対する不安など心理的負担に関するキーワードが多く挙げられた。その他、「障がい児・者への接し方」への不安もみられた。保育所実習、教育実習については、全日実習・部分実習に関する反省や指導案の書き方、ピアノ・読み聞かせなどの保育・教育技術に関してなど、「保育・教育技術の不足」に関するキーワードが多かった。

そのなかで、実習中、実習後に失敗や業務内容理解から「自分は保育者に向かない」と思ったとの発言もみられた。

(2) 実習前後の経験として有用なもの

実習前後の経験については、1つの実習終了後、次の実習があることから、あえて実習前、実習後と分けずに質問をした。

その結果、①人的内容、②保育・教育技術、③職場体験の3つに大別することができた。

① 人的内容

初めての实習となる施設実習の前には、上位学年である「2年生との交流会」を実施している。先輩自身の実体験を直接聞くことができる機会であるとともに、質問もできることから双方向での情報共有が図る機会としている。

この機会にて、学生たちは実習前の不安を緩和することができたと評価している。さらに、実習後の振り返りとして他の学生の経験談をきいたことが、自己の振り返りとなったとも評価している。

② 保育・教育技術

授業の中で行った、手遊び、ペープサート、手作り絵本、パクパク人形などの「保育・教育実践の教材」の作成などが挙げられた。

③ 職場体験

保育所、幼稚園、保育所以外の福祉施設でのボランティアが挙げられた。その理由として、子ども（利用児・者）とのかかわり方、発達や障がい等の理解を経験から学ぶことができたためとのことであった。

(3) 実習に必要不可欠な知識・スキル

実習に必要不可欠なスキルとして、挨拶、言葉遣いなどの「実習生としてのマナー」、「記録（実習日誌・指導案）の技術」、「遊びのレパートリー」が挙げられた。特に、遊びのレパートリーについては、年齢別や障がい別など同じ遊びでもアレンジができるスキルが必要であるとのことであった。

4. 考察

1) 実習事前事後の経験とリアリティ・ショックの関係

実習前の事前準備としては、精神的安定と時間的余裕を求めて実施していた。準備を行う過程で実習についてイメージし、実習内容に応じたボランティア先を選定し、活動していた。その結果、実習前の経験としてボランティアが有用だったと学生自身が評価している。

一方で、インタビューでの実習後のネガティブな発言から、実習時にリアリティ・ショックを経験していることが示唆される。特に、実習中のジレンマの影響が大きいと考える。

浅原⁴⁾は、専門職養成実習におけるジレンマ体験や倫理教育に関する先行研究を概観し、「専門職養成実習におけるジレンマは、[A：現場の体制や取組に関するもの]、[B：学生自身に関するもの]に大きく分けられる」とした。

本研究におけるインタビューから得られた結果においても、ネガティブな発言はこの2点に大別することができる。つまり、学生は各実習においてジレンマを感じており、その結果「保育者に向いていない」などの発言にみられるように、自己肯定感が低下したと考えられる。

その中で、自己成長曲線が上昇した背景には、現場の体制や取組に関するジレンマを実習前のボランティア経験や就職活動を意識したボランティアによって、軽減できたことが一因であると考えられる。また、学生自身に関するものについては、先輩や同級生との交流を図り、経験の共有を行うことで、自分の課題認識や思考に広がりがあり、ジレンマの軽減につながることができたのではないかと考える。その結果、学生自身がボランティア経験や振り返りが有用であったと評価していることが推察できる。しかし、一方で保育士・幼稚園教諭以外の進路を選択した学生は、ジレンマからの脱却が困難であったことも示唆される。

大野⁵⁾は、学生が進路を選択するうえでの実習の重要性に着目し、「実習を積み重ねていく中で、学生は、進路に対してだけでなく、「保育」という職務に関しても明確になっていく」とし、それが保育者アイデンティティの形成であるとも指摘している。この保育者アイデンティティの形成について、足立・芝崎⁶⁾が行った調査により、「保育者アイデンティティを形成するためには、保育者自身のたゆまぬ努力はもちろん必要ではあるが、それを支えるための周囲の環境が大きく関与することが考えられる」とし、その環境として、①人的環境、②外的環境を挙げている。足立・芝崎が行った調査は常勤保育者を対象としたものであったが、保育者アイデンティティ形成における環境整備は、保育者を目指す学生にとっても同様であると考えられる。

また、関谷・多川⁷⁾は自己成長曲線を「子どもの理解」と「意欲」の2種類の曲線にて表現し、「意欲」の曲線形状から「意欲」の揺らぎの経験が、学ぶ機会になると捉えている。しかし、一方で「揺らぎ」が度を越えたものであればサポートが必要であることを指摘している。

そのため、リアリティ・ショックを脱却し、保育者アイデンティティを形成するためには、学生の内的変化へのサポートも視野にいたした実習前後の振り返りや職場経験を中心としたシステム作りが重要であるといえる。

2) 職場と養成校をつなぐ実践的指導法

保育所、幼稚園、保育所を除く社会福祉施設（以下「職場」とする）における実践と資格免許に係る実習を学年進行により整理した（表1）。1年生夏季休暇期間までは、カリキュラム内の講義や課題として職場での実践を行い、保育者としての意識付けを行う機会としている。また、「子育て支援実習」という独自科目を設け、ボランティア活動や自主実習など、学生が自主的に職場実践を行えるようにしている。

これらの機会を活用して多くのボランティアに参加しており、ボランティア等で得た学びが、自己成長につながっていることを学生自身実感している。子育て支援実習の記録では、1年前期には実践内容は多く書けるものの、子どもの姿や対応の意図に関する記述は少ない状況である。しかし、各実習を終えるにつれ、その内容は具体的かつ根拠を持った内容となるなど、成長がうかがえる。

しかし、一方で「子育て支援実習」の単位数となる45時間を超える学生は、過去3年間においてそれぞれの学年の1割にも満たない。時間的制約もさることながら、目的を持ち自主的に活動することへの動機づけが必要であると考えられる。

そのために、実習のみならず、ボランティア活動に対する振り返りと次回への動機づけや、先輩、同級生など他の学生との情報共有ができる機会の設定が重要である。また、多くの職場にて実践している内容を学生たちから聞き取り、教員にフィードバックすることで教授内容や教授法を見直し、「卒業時と現場で求める実践能力のギャップ」を埋めることにも寄与していく必要がある。

5. おわりに

学生自身の実習体験の振り返り、実習前後の経験の有効性を検証することで、職場と養成教育をつなぐ実践的指導法を検討してきた。

本研究において、実習前後の職場での経験と先輩・同級生など学生同士の経験の共有が、実習時のリアリティ・ショックの緩和に役立つと示唆された。しかしながら、実習前後の職場での経験を自主的に実施するためには、職場経験の振り返りと動機づけが重要である。

今回の研究では、その具体的手段まで言及することはできなかった。しかし、自己成長曲線を学生自身が作成したことにより、自分自身の経験を振り返り、ボランティア活動を含めた職場経験によるものが成長の一因となっていると意識できたことは、振り返り、動機づけのツールとして活用できる可能性がうかがえる。今後検証し、具体的方策を明らかにすることが課題である。

6. 謝辞

本研究は、山陽学園大学・短期大学学内研究補助（平成28年度、29年度）を受けて遂行することができた。深く感謝申し上げます。

【引用・参考文献】

- 1) 加藤光良・鈴木久美子（2011）新卒保育者の早期離職問題に関する研究Ⅰ～幼稚園・保育所・施設を対象とした調査から～. 常盤学園短期大学紀要（42）, 79-94.
- 2) 森本美佐・林悠子・東村知子（2013）新人保育者の早期離職に関する実態調査. 奈良文化女子短期大学紀要（44）, 101-109.
- 3) 一般社団法人 全国保育士養成協議会（2016）平成27年度 専門員会課題研究報告書 学生の自己成長観を保障する保育実習指導の在り方Ⅱ—ヒアリング調査からの検討—
- 4) 浅原千里（2012）社会福祉士実習生のジレンマ体験の特徴とスーパービジョンの在り方—事例の分類を通して—. 日本福祉大学社会福祉学部『日本福祉大学社会福祉論集』（127）, 81-99.
- 5) 大野和男（2018）進路決定における保育実習・教育実習の重要性と実習時のリアリティ・ショック. 鎌倉女子大学紀要（25）, 35-48.
- 6) 足立美里・芝崎正行（2010）保育者アイデンティティの形成過程における「揺らぎ」と再構築の構造についての検討—担当保育者に焦点をあてて—. 保育学研究（48）, 107-118.
- 7) 関谷みのぶ・多川則子（2017）自己成長曲線による短大2年間の学びの可視化. 教育保育研究紀要（3）, 11-17
- 8) 谷川夏美（2010）幼稚園実習におけるリアリティ・ショックと保育に関する認識の変容. 保育学研究（48）, 96-106.

〔図表〕

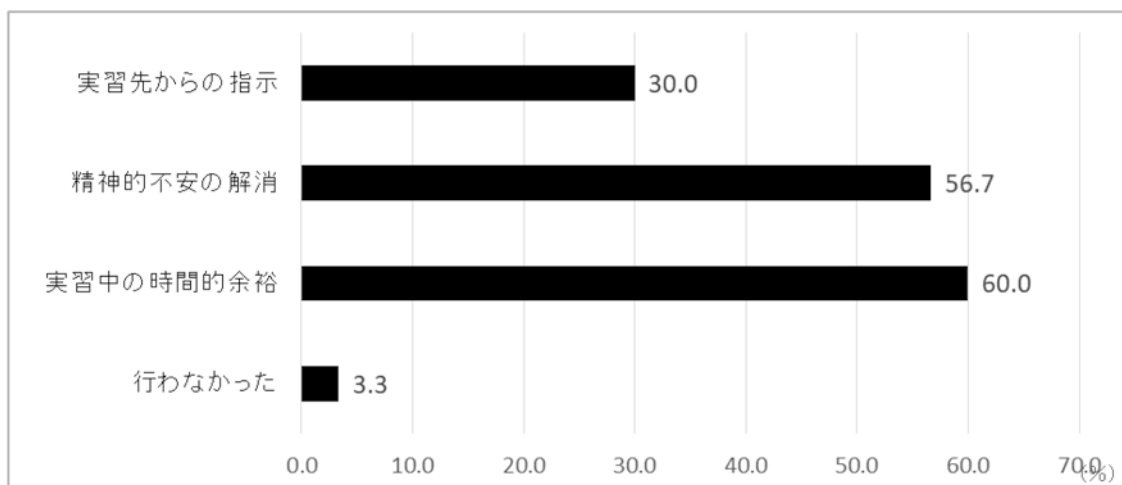


図1 事前準備を行った理由

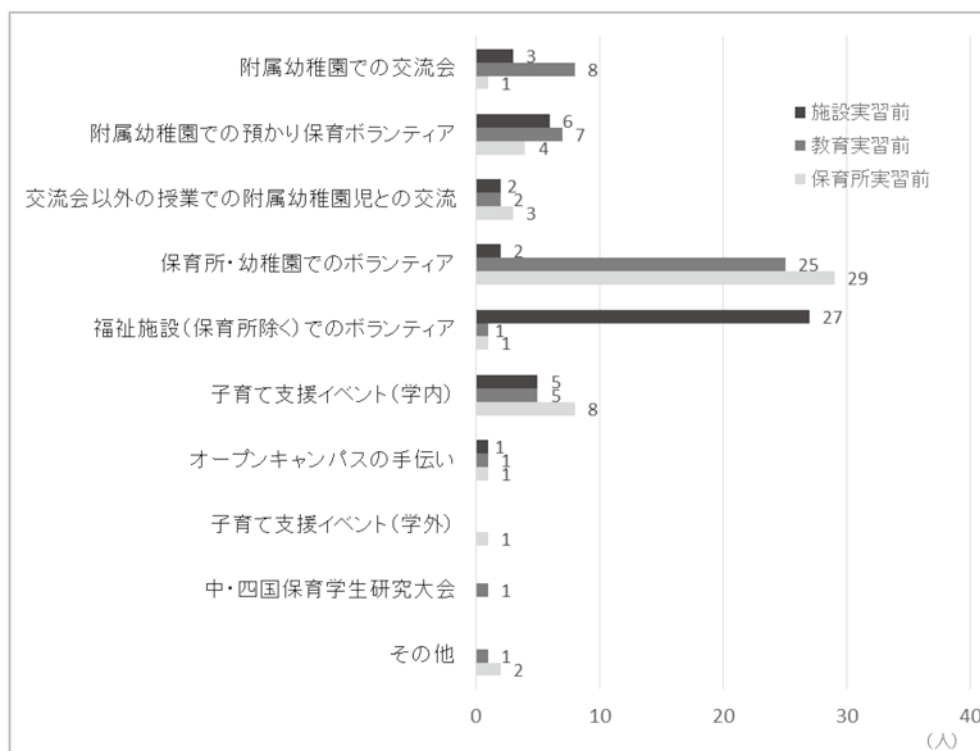


図2 実習別にみる実習前経験

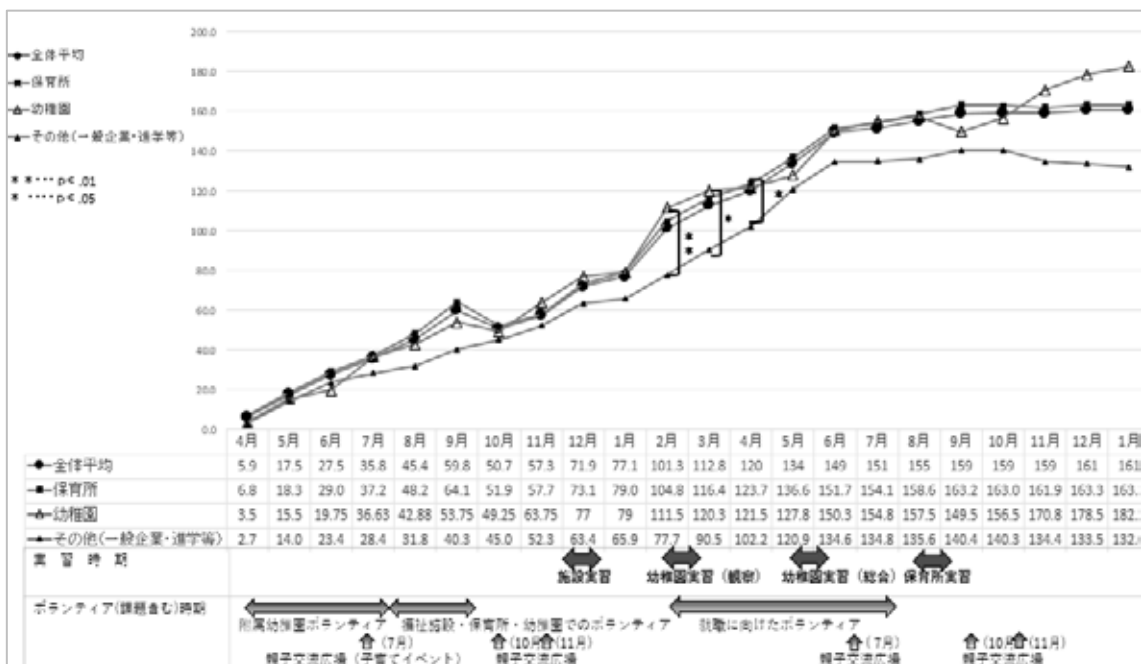


図3 自己評価曲線

表1 職場における実践の現状

時期	職場との連携	資格・免許に係る実習
入学時	附属幼稚園での交流会	
1年前期	★ボランティア活動 ・附属幼稚園(課題あり) ・近隣保育所	
1年夏季休暇	★ボランティア活動(課題設定) ・近隣障害児施設 ・児童養護施設等 ・地元幼稚園・保育所 ・附属幼稚園	施設実習(12月)
1年後期	○ボランティア活動 ・親子交流広場	
1年春季休暇	○ボランティア活動	教育実習〔観察〕(2~3月)
2年前期	※就職活動目的	教育実習〔総合〕(5~6月)
2年夏季休暇		保育所実習(8月~9月)
2年後期	○ボランティア活動 ・親子交流広場 ■就職先での研修	

★…課題活動、○…自主活動、■…就職先指示